

歩くリズムで書いた人

一昨年の4月だったか、井川町教育委員会の六郷博志教育長から「子どもたちのふるさとへの理解を深めるために、郷土の偉人・武埜三山（本名祐吉）の文学選集を作りたいので力を貸してほしい」との連絡をいただいた。

三山のことなら喜んで、とお引き受けし、作品の選定から編集、レイアウト、装丁、書名、紙の選びなどに関わらせていただき、98頁の本が、このたびめでたく完成。書名は『三山の俳文の呼吸』とした。

生前7冊の本を上梓している三山の作品から五つの短編を収録し、ほかに資料として三山の長女の方の文章をはじめ4人の文章を、また、付録として年表を載せた。

ことである。

昭和2（1927）年に刊行した『単純な男』から「三吉」という題の、自伝的な小説を収録したが、最初に刊行した自著の作品の冒頭が「歩く」ことに関する。

三吉は七つの春から村の小学校に通わされた。村は九つの部落から成っている。三吉の部落は村の一番奥の高い山の根に展げて学校まで半里からある。その間に人家は一つもない。僅かに展げている田圃と野原と栗や榎や松などの林である。細い幾曲がりにも曲がった山路を毎日草鞋を穿いて通わなければならなかった。自分で穿く草鞋は自分で作るようにと育てられたから、小学校に通う頃は草鞋の作り方を知っていた。

本作りの過程で、あらためて三山の文学に触れ、いくつの特徴に気がつくされたが、その最たるものは、石川理紀之助がそうだったように、何よりもまず、三山が「歩く人」だったという

自動車が普及する前の時代のことでもあり、道路は舗装されておらず、移動はもっぱら歩くか、あるいは馬の背に跨るかであっただろう。三山が書いた作品に



④ 自宅で筆を執る武埜三山（撮影年不詳）。三山は上井河村（現井川町）出身。秋田魁新報社社長や同村村長、秋田市長を歴任する傍ら、井川などを舞台にした小説や随筆を数多くつづった⑤井川町教委が作成した「三山の俳文の呼吸」。井川義務教育学校6～9年生に今月から配布し、国語の授業に活用する



みづら・まもる 1957年井川町生まれ。出版社「春風社」社長。著書に「父のふるさと 秋田往来」、詩集「カメレオン」「鱚hadahada」など。横浜市住。

は「歩く」こと、また、歩きながら見た風景や人びとの姿が印象深く描かれている。今回収録した五つの作品に限って見ても、「歩く」ことが、いかに三山の洞察の目を鍛えていたかを思い知らされる。

たとえば『離村記』から今回収録した「美人の女医さん」には、女医さん夫妻と秋田駅で落ち合い、羽後飯塚駅で汽車を降り、そこから歩いたこと、女医さんの下駄の緒が切れ、村はずれの農家から古い草鞋をもらって履いてさらに歩き、やがて大雨にたたられ、最後は裸足で役場に行き着いたことが淡々と、それでいて実にリアルに記されている。

しかし、歩くことで鍛えられたのは、目だけではなかった。

帰農したばかりの私にもできそうなことは、鶏を飼って、餌をくれる位のものであると思っただが、専門家にいわせると、それが一番むずかしいそうである。餌のくれ方一つで、卵を産んだり、産まなかったり、また病気にもなるという。私は専門家から、一通りの講釈をきいて一応の知識を仕入れてから、飼うのが本当かも知れないと思っただが、養っている中に、自分でたべる位の卵は産んでくれるだろう、と極く簡単に考えて、飼う気になったのであった。

『離村記』にある「わとりの夫婦」の冒頭部分。こういうほのぼのとした記述から始めて、生まれたばかりの雛の死の恐るべき描写、そして、いのちあるものの幸福についての論考は、まさに、低地からゆっくりと急峻へ向かう歩行とも感じられるが、内容とあいまって、右に引用した箇所を読み返すと、読点がやや多めであることに気づかされる。

しかし、この文章を何度か声に出して読んでみると、この読点が、意味はもとより、息づかいの区切りでもあると感じられ、それが心地よく、読み手の呼吸が、書き手である三山の呼吸と知らず知らず重なってくるようで驚く。三山の文章は、黙読でなく、音読すること、さらに真価を発揮する。まさに「歩く人」の呼吸で書かれた文章だ。いつしか山は深く笑い、川はゆったりと、さざ波の音を響かせながら目の前を流れていくようなのだ。

最後の一行を思い定めなければ最初の一行を書き始めない、という著名な作家の話聞いたことがあるが、三山の作法はおそらく違っている。インスピレーションを得て一行目をまず書く。一行目を書いたら二行目を書く。二行目を書いたら三行目……。

三山のご長男、林太郎氏にお目にかかった折、秋田駅まで車で送ってくださいました奥様がこんな話をされた。「義父が物を書いているとき、まわりに反古紙が捨てられているのを見たことがありません」。一歩を踏み出し、つぎの一步を送り出す。歩くように書いた三山の筆法を想像する。歩きに歩き、記者魂を胸に秘めた三山の面目躍如だ。

中国の古典『荘子』のなかにつぎの言葉がある。「真人の息は踵を以てし、衆人の息は喉を以てす」。真人の息は踵であるように深く深い。昭和39（1964）年4月、三山は心臓麻痺のため死去。享年74。

三山の深い息と洞察の鋭さを幾分でも演出し、表現することを願い、本文には土を感じさせ少しざらつきのある紙を、見返しは、若草色の上質紙を、本文の文字は、切っ先がシャープで鮮やかな書体を使用した。